

---

# 東方執事物語

ダン・ボール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方執事物語

### 【Nコード】

N1458Z

### 【作者名】

ダン・ボール

### 【あらすじ】

この物語は古来よりスカレット家に仕える一人の執事が主人公の物語である。警告この物語には、ハーレム、オリ主、原作無視、キャラ崩壊、オリ主マルチチート、作者、文才チリ以下、更新バツラバラ、等が含まれております。あー、俺には無理、と思った方はバツクをお勧めいたします。まあ見てやる、といった心広い方は使用上の注意を読み用法を守って、気長に、正しくお読み下さい。・・・警告は・・・しました・・・よ？

## 執事プロフィール(前書き)

とりあえずは紹介です。

駄文ながらこれからよろしくです

## 執事プロフィール

名前

アレス・スカーレット

性別

男女両方

ランダムで変わる。1日経つと変わることもあれば、1週間以上経つても変わらないこともある。

年齢

紫よりは間違いなく上・・・

能力

男の時

あらゆる武器を扱う事ができる程度の能力

女の時

あらゆる能力を無効にする程度の能力

外見

男は髪、目、ともに美しい青色、男の娘

セミロングで後ろで纏めている

女は髪、目、ともに美しい真紅

ポニーテール

その他説明

性格はDSで冷静でノリが良い。

家事はなんでもござれ、知識も豊富。

一時期幻想卿から出ていた。理由はまたいつか・・・

恋愛にはそれなりに鋭いが、確信するまでが長い。  
ようは気付いたのはいいが、もしかして違うかも・・・と考えたり  
してかなり遠回りする。

## 執事プロフィール(後書き)

もう何も言つまい・・・

すいません、やっぱり一言・・・やりすぎた感が・・・

**第一節 執事の日 前編（前書き）**

一日が始まるみたいです。

クリスマス・・・さびシマス

## 第一節 執事の一日 前編

皆様、こんにちわ。

偉大なる主、レミリア・スカーレットの執事、アレス・スカーレットでございます。

え？スカーレットって名前あるのになぜ執事なんかしているのかだつて？

まあ、いずれお話ししよう、ええ、いずれ。

さて、そうこうしてる間にお嬢様が起きられたみたいですよ。

え、なんでわかったか？

・・・慣れ？

まあ、なんでもいいでしょう。おや？どうやら私も御呼びのご様子。一日の紹介も兼ねていきますか。

執事移動中・・・

「遅い！！」

いきなりですねお嬢様、慣れましたが・・・



「遅いと申されましても、私には咲夜みたいに時を止める能力はありませんし……」

「そんなもの関係ないわ！呼んだら1分以内に来なさい！」

「ですが、お嬢様、この館は肝心の主ですら迷うようなところ、それなのに私めが迷わずに来るのは厳しいかと……」

「なっ！？ま、迷ってないわ、さ、散歩しているだけよ！」

「ほう、最近の散歩は咲夜と泣き叫びながらするものなのですか、勉強になりました」

「えっ、いやっ、あれはっ、その……うっ、咲夜っ！」

相変わらず楽しいお方だ、ついでに泣き叫んでいたのは昨日のこと。そんなことを思っていると、咲夜が苦笑しながら、涙目のお嬢様を慰めている。

「相変わらずですね、アレス様」

「まあね」

楽しくてやめられません、お嬢様いじりは。

さて、今だ涙目のお嬢様は咲夜に任せて、フラン様を起こしに行きますか。

「咲夜、私はフラン様を起こしに行くから、お嬢様をよろしく」

「わかりました」

「うっ……」

そんな目をされても怖くありませんよ？

では、移動移動……

執事移動中……

さてさて、まいりました、地下室。

そういえばまだパチュリー様にお会いしてないですね

ああ、今日はおかけると言っていましたね。喘息がひどくならなければいいのですが……

まあ、とりあえずは気にしないでおきましょう。

まずはドアを開け確認を……

一つ目、部屋の雰囲気確認……よし、普通。

二つ……ん？その確認はなにか？昔起きた事件を機に私がするようになった事です。

あれはすごかったですね、なんせ妖精の死傷者数（消滅か？）が半端ないことになりましたから。

それにお嬢様や、咲夜、美鈴、パチュリー様、私とフルで出撃しま

したし。

さらにすごいことにその全員が大なり小なりと負傷しましたし。その中で運よく私がかすり傷で済みましたが・・・

あ、そういえば、この事件の理由、言ってますね。簡単に言いますと

お嬢様がフラン様を起こす　フラン様たたき起こされ超不機嫌　姉妹喧嘩　喧嘩による狂気解放　大乱闘

以上。

まあそんなこともあり、こういう確認するようになったのです。・・・とはいっても2つくらいですが。

二つ目・・・これは身体にダメージがあるからとても、非常に重要である。

それは「おはよー!!!」「ぬおおおおおおお!!!」

「おはよう、アレス!!!」

「は・はい・・・お・おはよう・・・ござい・・・ます」

これが理由である・・・ときどきフラン様はこんな風に抱きついてくるのです。

ただ、普通の人間ならそんなに痛くないし、多少よろける程度ですが、フラン様はあの吸血鬼・・・差は歴然である。

それにこの方は力加減がまだうまくできません。おかげでこのざまです。・・・私、妖怪でよかった。

それと二つ目の確認とは・・・もつわかりますよね？  
周囲に隠れていないかの警戒です。

さて、確認も終り、腰の痛みも引いたし、腹の上に跨っているフライン様を降ろしますか。

・・・ああ、また美鈴に壁の修理頼まないと。

ついでにこれで5327回目ですね。

「フラン様、少しは加減してください、いずれこの腰が潰れてしまいます」

「ん~~~~・・・がんばってみるね!」

ついでにこのやり取りは5301回目。

「お願いしますよ・・・それはそうと、朝食ができていますよ」

「はーい!」

まあ、この可愛らしい顔を見れるなら安い・・・か？

第一節 執事の日 前編（後書き）

もうちょっとマシにしたいですね・・・  
スキー行きたいなあ・・・

執事の一日 後編(前書き)

散歩行く ネット浮かぶ 気分最高 うまく書けない、表現できない

orz  
ループ

まさに負の連鎖。しっかりしろよ、書けよ、やれよ俺・・・

## 執事の日 後編

皆様こんにちわ、初めてのの方は初めまして。

前回腰がいろんなことに使えなくなりそうになった、アレス・スカ  
ーレットです。

では、さっそく、行ってみましょう。

執事移動中・・・

やってまいりました、紅魔館名物(だと思えます)ヴワル図書館。

え？お前食事はどうするんだって？私はあまり食べません、てい  
うより食べなくても大丈夫なのです。

それにここは私の警備するところなので。

なぜ警備する必要がある「突撃ー！ー！ー！」・・・ほらね？さて、  
今日もぶっ飛ばしますか。

「今日こそはアタイが倒してやる！」

この子は散るん、んんつと、チルノです・・・ん？今のはなに  
かかって？まあ、見てればわかりますよ。

「また来たのですか、散るん、じゃなくてチルノ」

「ふふん、勝つまで何度でも来るわよ、だって、アタイ最強だもん  
! ! ! ! !」

「……そんなに薄いものを強調しなくても……どことはいませ  
ん、ええ。」

「チ、チルノちゃん、やめようよ〜」

この子は大妖精、または大ちゃん、苦勞人です。

「……相変わらず大変そうだね」

「い、いえそんな!こちらこそいつもすいません! ! ! !」

ああ、なんて真面目な子なのだろう、あとで、飴ちゃんをあげよう。

「さあ、羊、勝負よ! ! ! !」

「羊ではなくて執事ですよ」

だから?と言われるんですよ。



「そ、そんなのどうでもいいのよ!!--いくわよ!!--」

あ、そろそろ、時間が・・・面倒ですね。ここは漫画でよく使われる伝家の宝刀、バット!!--を使いましょう。

「申し訳ありません、散るの」

「なんか名前が違う気がするけど・・・何よ」

「時間が来てますのでお帰りいただきますね」

「え?」

さて、対散るの、じゃなくてチルノ用のスペルカード、いきますか。

「伝家・・・」

「え、ちよつ」おかえりください散るの!」「名前違っつっつっつっつうう!!--!!--!!--(キラっ(」

ふっ、今日もつまらぬ者を打ってしまった。これで打点は2401打点です。

「あ、チルノちゃんーん、待ってー！ー！ー！ー！ー！」

あ、飴ちゃん・・・まあいいでしょう、また来た時に渡せばいいでしょう。

「・・・次、いきますか」

本日の警備は今ので終了ですし。あっ、あとさっきのスペルにはもう一つ別のあるですよ。

まあ、あまり名前は変わりませんがね・・・その名も伝家「お帰りくださいお客様！」です。

あ、どうでもいいですね、そうですね、じゃあ行きましょうか。

執事移動中

次の場所は・・・自室です。

なぜ自室か？・・・それは、待機のためです。

まあ、要はしばらくやることはないのですよ。

本来ならさらにすべきこともあるのですが、お嬢様が

「あなたは本来執事ではなく当主なのだからそんなものしなくていいのよー！」

だそうです・・・。

まあ、確かに本来血が繋がっていたら、ですけど。そのことを申しますと

「そんなことは関係ないのよ!」

だそうです。それでも私が渋るとお嬢様が折れて

「わかったわ、やらしてあげる。でも!!あなたは本来私たちの兄であり、スカーレット家の当主、そのことは忘れないで!」

とのこと。

それから執事をやらせていただきました。が、咲夜が来てからは私のやることはかなり減りました。

まあ、それでも色々忙しかったですがね、咲夜のメイド修行で。初めのころはそれはもう、目も当てられないほどで……。

まあ、この話はまたいずれしましょう。

さて、やることも無いですし、少し眠りましょう、どごその門番みたく。

あ、最後に一つ、私、今日は男ですよ。

え、今さら?……ですね。

では、おやすみなさい……。

執事の日 後編(後書き)

だ・ぶ・ん、来ちまったよ、ちきしょうめ!

あゝ、もう今年も終わりが近づいてきたなあ、はやいなあ。

そしてやることが少ない執事・・・執事なの？

第二節 執事、宴会に行く 前編（前書き）

なんだろう、最近俺の自重神が叫んでいる気が……

## 第二節 執事、宴会に行く 前編

皆様、こんにちは。

仕事という仕事がないのになぜか執事をしている、アレス・スカーレットです。

・・・はっ！すいません、先程まで寝ていたものでしてちょっとぼーっとしてしまいました・・・。

さてさて、とりあえずどのくらい寝ていたのでしょうか、時計を見てみましょう・・・2時間ですか。

結構寝てましたね。

とりあえずやることも無いですしどうしまししょうか、二度寝しまし  
ようか？

5分経過

10分経過

20分経過

・  
・  
・  
・  
30分後・・・

何も思い浮かばないですね、ええ、全く。

二度寝したくても目が覚めていますし、さてどうしm「お兄様ー  
ー!!!」・・・これで暇では無くなりましたね。あと、雇  
てくれてありがとう。そしてごめん、美鈴。

とりあえず、フランさま、じゃなくてフランが私に用があるみたい  
ですね。

え、なんで様呼ばわりじゃないかって？日付変わりましたし。

それにプライベートと仕事は別にしてあるからですよ。

というのも、実はレミリアが

「あと、やるからにはプライベートと仕事は分けなさい」

とのおっしゃったんですよ。それで分けました。まあ、普通ですよ  
ね。

ついでに私は昼夜と違い仕事は毎日ではないんですよ。

今のところは、月、水、木が私の仕事の日です。勤務時間は日付が  
変わるまで。

え、なぜ毎日じゃないのか？レミリアに聞いて下さい。あの子の我  
儘でこうなったんですから。

それはそうと、フランは私に何の用なのでしょうが。

「どうしました？」

「お姉様がね、今日あの色々と貧相な巫女の所で宴会があるから来なさいって」

「そうなのですか」

宴会、ですか・・・

「あの、フラン？」

「なあに」

「その宴会、誰が来るんですか？」

「ええっと、魔理沙、貧乏巫女、隙間ばり、妖怪とあと・・・」

ああ、あの隙間が来るんですか・・・できればもう二度と会いたくないのですがねえ。

「・・・くらいだよ？」

「そうですね」

残念ですが辞退しますか。



「申し訳ないですが、じたいs」駄目よ、お兄様「・・・なぜです？レミリア」

いつの間にかレミリアが部屋にいた。

「連れてくるように隙間とその式、あと亡霊、拳句には花妖怪からもお願いされているから」

「・・・行かないとどうなります？」

「そうね、たぶん紅魔館が消えるんじゃない？あの物言いだと」

なんとという脅しだ。せつかく今まであの隙間と式、亡霊姫に花妖怪にも会わずにいれたのに。

「・・・」

「ねえ、お兄様」

「ん、何ですか？」

「そろそろ話してよ」

「・・・またですか」

「ええ、またよ。昔、何があつたの？あの隙間達と・・・」

「・・・まだ、話せません」

「・・・そう」

そういうととても悲しそうな眼をするレミリアとフラン。

でも・・・そんな眼をされても・・・まだ、話したくありません。  
申し訳ありません・・・。

私は心でそう謝罪をする。

「とりあえず、ここを守るために今回は参加しましょう」

「ええそうね・・・」

さて、宴会か・・・血を見ることにならなければいいですが・・・

第二節 執事、宴会に行く 前編（後書き）

んん、ちよいシリアス？かな  
さあて、どうなるのやら・・・  
ついでに紅霧異変は起きてない。  
なのに魔理沙と霊夢と知り合い・・・謎だぜ、俺

執事、宴会に行く 中編(前書き)

2連発・・・しっかりしようか、俺。そのうち俺の自重神に怒られるぞ

執事、宴会に行く 中編

皆様、こんにちわ。

宴会のせいで気分最低なアレス・スカーレットです。

今私は地下倉庫でどのワインを持っていくか悩んでいます。

一応候補は挙がっているんですよ？

その候補とはこの4つです。

スカーレットワイン

デビルブラッド

ブラッディマンオイ

ワイン

・・・ええ、私も色々言いたいですよ、本当。まともな物は無いのかとか、普通は？とか。

でも無いんですよ。まともが。

だってほかのが

バーニング

とか

I c a n  
f l y

とか……

なんです、バーニングって!?

あれですか、叫びながら飲むんですか!?

最後のなんて飛ぶんですか!?!ええ!?

みたいにまともなのがありません。

とりあえず仕方ありませんから、この『ワイン』にしましょう。

1番まともです。まあ名前が普通過ぎますが。

「決まりましたか？」

咲夜か。

「まあ。大体は」

「そうですね」

と微笑む咲夜。相変わらず綺麗な笑みですね。昔はあんなに殺気をまとった笑みだったのに。

「ふふ」

「どうかしましたか？」

「いえいえ、ただあれほど笑うのが苦手だった咲夜がこんなに綺麗に笑うようになったものだからから、つい」

「き、綺麗だなんて、そんな・・・」

照れてる咲夜もかわいいいなですね。さぞモテるでしょうね。

「そういえば、君に好きな人はいるのですか？」

「ふえ？・・・す、好きな人ですか!？」

何を慌てていうのでしょうか？ははくん、さてはいるんですね。

「いるんですね？」

「え、あ、えつと・・・はい・・・」

おやおや、顔が真っ赤ですね。

「どうなんです？その人とは」

「・・・」

さっきの慌てぶりから一転、しょんぼりしている咲夜。・・・まあ、  
なんです、チャンスはまだありますよ。

「チャンスはまだありますからがんばってください」

「・・・ええ、がんばります」

そう言いながら、腕に抱きつく咲夜。・・・まさかな。あと、胸、当たってるよ。ついでにPADじゃなかったんだな・・・ま、まあとりあえずがんばれ咲夜！

その後、適当に選んだワインを持って咲夜と一緒にレミリアのもとに行く事にした。

なぜか、レミリアに睨まれたが・・・なぜだろう？



執事、宴会に行く 中編（後書き）

まあ、宴会に行くまでのちょっとした話ですね。  
あと地味に咲夜フラグ立っている執事。気づいてやね。

執事、宴会に行く 後編(前書き)

クリスマス・・・さびシマス

カップル・・・殺シマス

というか、1年過ぎるのが早いなオイ

## 執事、宴会に行く 後編

皆様こんにちは。

今絶賛歩きながら八つ当たりを受けている、アレス・スカーレットです。

なぜなのでしょう、咲夜と一緒に居ただけなのにレミリアにもものすごく怒られています、ええ、ほんとに。ついでにフランにも。

理不尽です、意味不です、無茶苦茶です。

今も横から「なんで咲夜と・・・」とか「そもそも私が・・・」とか思いつきり言われているのですよ。

咲夜は咲夜で「リードですね」とか「これに関しては主従関係なんて・・・」とか所々レミリアやフランに茶々を入れるものだから、さらに大変なんですよ。

はあ・・・それでなくてもあのクソ隙間のみならず、あの亡霊、拳げ句には狐に花妖怪まで・・・。

「・・・はあ」

鬱ですね。

え？なんでそんなに奴らが苦手なのかって？

・・・その質問は間違ってますよ。正確には『苦手』ではなく『大嫌い』ですよ。さらに正確にいうと『憎い』です。

で、その理由は・・・私の大切な家族を奪ったからですよ。ええ、物理的に、命を。しかもご丁寧に私の目の前で、楽しそうに笑いながら。



幽香

そして我らがレミリアと咲夜、そして私。

まあ、小規模なのですかね、この幻想卿では。

ていうかパチュリー、ここに来ていたのですか。こあも。

あ、今さらながらどういう経緯で知り合ったお教えしておきましょう。

霊夢はたまたま買い出しに行っている時に会いました。

魔理沙は魔法の森で珍しい物を探している時に。

アリスも同じ。

後には必要ないですね。

・・・まあ、八雲や亡霊などの出会いはいずれ話しましょう。

「あら、来たの？」

「来ましたよ」

「遅いぜ」

「まあ、色々だね・・・」

「こんにちは、アレス」

「こんにちは、アリス」

「案外遅かったのね」

「まあ、レミリアがちょっとね・・・」

「大変ですね・・・」

「慣れましたよ」

次々と挨拶を済ませていると視線を感じました。  
八雲たちです。

・・・仕方ない、挨拶しますか。あまり空気を重くはしたく無いですし。

「これはこれは、賢者様、ご機嫌いかがですか？」

「・・・まあまあね」

「そうですねか、他は？」

「紫様と同じだ」

どうやら他の3人もそうらしい。

そうですねか。まあどうでもいいですが。

「そうですねか、では私はこれで」

「あ・・・」

と伸ばそうとして引っ込める八雲紫。

まあ、奴らに私を止めることなのできないでしょうがね。  
私はそれを無視することにしました。

「ああ、それと一つ」

「・・・何？」

「貴様らを許す気などないからな。これは一応礼儀で挨拶しただけだ。昔のように楽しく喋りあえると思うなよ？」

「っ!・・・」

「じゃあな」

紫だけではなく他の3人の顔も悲しみに染まっているようです。  
私はそれを無視して、こちらを見ていたレミリアのもとに向かいました。

「おわかりいただけました？」

「・・・ええ」

「そうですね」

レミリアも今のを見て理由は分からなくても、どういう関係かは分かっていたみたいです。

「でもなんで？あのあなたが敬語以外で喋るなんて・・・」

「別に元から敬語ではなかったですし、あいつらには、その必要もないですから」

「・・・」

「ではレミリア、私は手伝いなので」

私はレミリア達を置いて、手伝いに行くことにしました。

ついでにあのあとからはレミリアも私、八雲達も気分は上がり、宴会を終えました。

霊夢や魔理沙達はクソ程テンションが高かったにも関わらずに・・・



執事、宴会に行く 後編（後書き）

ついでに作者は八雲家も好きですよ、亡霊も花妖怪も。

さてさて・・・もうちっと文の書き方を変えてみようかな・・・

まだまだ改善せねば

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1458z/>

---

東方執事物語

2011年12月26日01時46分発行